結城合戦ののち、関東の秩序は上杉家が代行するものの、その後も定まることはなかった。器が、必要だった。

足利氏という、器に見立てや組織が、やはり関東の秩序なのである。関東足利氏が必要であると、幕府は決断した。そのため、永寿王あらため足利成氏は、新しい関東公方として、鎌倉へ迎えられた。関東に新しい秩序が求められようとしていた。が、それの構図は、所詮、上杉氏が勝手に描いたものであり。成氏の存在は、その傀儡にすぎない。

かつて、足利公方家に忠節を誓っていた多くの者たちは、先の戦さで没落した。鎌倉府の要職に就く者の多くは、上杉派によって横領されていた。成氏には、それが堪えられなかった。

成氏にとって、上杉氏は、やはり敵であった。

このときの関東管領は、父・持氏を討った上杉憲実の子・憲忠。快く思わぬ者同士が治世を行うなど、所詮は適わぬ話である。

そして宝徳二年（一四五〇）四月、上杉憲忠の執事・長尾景仲が、突如、鎌倉の成氏館を襲撃したのである。これは明らかに、憲忠による「足利公方排斥」の実力行使に他ならない。この襲撃を、からくも逃れた成氏は、江ノ島に一旦落ち着くと「房総には信の置ける者がいる。いざというときは舟で彼の地へ」と口にしていたが、小山・宇都宮・千葉・小田といった豪族たちに擁されて、上杉側と交戦状態になりながらも、やがて、かりそめながらも幕府仲裁により和睦が結ばれた。が、もはや成氏にとって、父の仇である上杉氏など信用するつもりはない。

享徳三年（一四五四）一二月、足利成氏は結城成朝（氏朝の子）・武田信長（甲斐源氏）・里見義実（家基の子）を召出し「上杉右京亮（憲忠）を討て」と命じた。三人は躊躇いなく応じた。父を結城合戦で失って以来、里見義実は流浪のなかで、世が移るのを待ち続けていた。父の意思を継いで足利氏に仕えたのは、これもやはり、意地に他ならない。

この日、一二月二七日。

足利成氏は上杉憲忠に「諍いは諸国に悪しき災いとなる。我らは仲違いするべきではない」と呼びかけ、鎌倉西御門の邸宅へと酒宴の招きをした。

このとき、不思議なことに憲忠は、素直にその招きへ応じたのである。疑念を抱かなかったのだろうか。否、恐らくは成氏を過小評価していたのであろう。これまでの諸豪族による軍事行動の殆どは、成氏側から仕掛けていない。成氏はこれまでも、降りかかった火の粉しか払わず積極的な好戦を示したことがなかった。

「適当にあしらって参る」

そういう気概で、上杉憲忠は成氏の邸へと赴いた。

その場では終始和やかに事が運び、すっかり酔ったまま、憲忠は帰宅した。このとき、油断が生じたのである。その夜、三〇〇もの成氏側の兵が、憲忠邸を襲撃した。

「あの腰抜けが……おのれ、謀ったか」

憲忠側の兵は二二名、もはや一方的ななぶり殺しである。憲忠を討ったのは結城成朝の家人・金子祥永・祥賀兄弟だった。上杉憲忠を血祭りにあげた足利成氏は、味方する軍勢を加えてみるみると軍勢を拡大した。そして翌年一月五日、鎌倉を発って多摩川流域にある高安寺に布陣した。上杉勢が迫っていたからである。

両軍の激突したこの戦いを「立河原合戦」といい、この緒戦で足利成氏は上杉勢を撃退した。この戦いが、二〇年におよぶ「享徳の大乱」のきっかけとなるのである。

幕府は足利成氏の挙兵を「第二の永享の乱としてはなるまじ」

と、追討軍を差し向け鎌倉を抑えた。そのため、成氏は下総国下河辺荘古河へと居を構えた。

古河はかつての鎌倉公方の御料所であり、水利に富んでいた。しかも、北関東の味方に頼るべき立地に恵まれていた。

これにより、鎌倉公方は廃され〈古河公方〉の時代が始まる。それは一足早い、戦国への兆しでもあった。

＋＋＋＋

関東争乱（3）

夢酔　藤山